

被爆80周年原水爆禁止世界大会・広島大会 「安野発電所への中国人強制連行・被爆の歴史を歩く」

中 清司

原水禁世界大会・広島大会のプログラムの1つとして「安野発電所への中国人強制連行・被爆の歴史を歩く」フィールドワークを今年も8月5日に行いました。今回は9回目で9人が参加されました。秋田出身で花岡事件に関心がある記者の方、岩手県出身で旧新日鉄釜石付近に住む方、横浜からの参加で花岡事件に関するドキュメンタリーの映像作品を制作中の方、愛媛からの参加で住友別子銅山についてご存じの方、米国の大学教員で日中の戦後補償問題を研究されている方などがいらっしゃいました。フィールドワークの進行、説明は事務局長の川原洋子さんが行いました。

皆さんの集まりが早く、定刻の朝8時より10分前にマイクロバスで平和記念資料館前を出発し、1時間余りかけて安野発電所に到着しました。車中で一日の予定を伝え、各自自己紹介の後、地元の放送局が制作したDVD「和解～広島・中国人強制連行問題の軌跡」を観賞しました。

到着した安野発電所前で、発電所工事の概要を説明し、発電所のすぐ前にあった坪野収容所内の様子と監視体制、監視員の家族など近隣に住まっていた方の証言内容を伝えました。



その後「安野 中国人受難之碑」前に移動し、西松建設との和解、碑建立の経緯、中国人生存者や遺族を招いて碑前で行った追悼行事などについて説明し、記念碑を各自見て頂きました。

次いで安野発電所建屋の真上にある貯水槽に移動しました。ここは、上流の土居取水口で取り込まれた水が、全長7.7キロの導水トンネルを経て再び地上に姿を出すところです。水は貯水槽から水圧鉄管に流れ込み、65m下の発電所内にあるタービンを回転させ発電します。

参加者は、ふもとにある碑から貯水槽まで急坂を登りながら高低差を実感し、工事の様子に思いを馳せる時間となりました。今は舗装され階段も作られていますが、当時は舗装されていない山道を草鞋(わらじ)履きか、裸足で歩かされたこと、50kg近いセメント袋を担ぎ上げていたことなどを伝えました。

貯水槽では中国電力の方が発電設備について説明をされ、川原さんが工事中の写真を示しながら当時の様子を伝えました。

その後バスで善福寺に移動しました。碑に刻まれている「安野 中国人受難之碑」を揮毫された藤井慧心住職から、生存者や遺族が来日する毎に行っている法要にこめた思いを伺いました。住職が「戦争をせず、平和で有り続ける為に、言葉で伝え訴えて行きたい」と短く述べられたことが印象的でした。

川原さんは、善福寺が亡くなった中国人5人の遺骨を保管していたこと、1958年に5人を含む安野の26人分の遺骨が中国に送還されたこと、和解事業で来日した遺族たちは碑の前で開催される追悼式で献花し、追悼式後に紙銭を焼いて中国式の追悼をし、さらに善福寺の追悼法要に参加することで次第に心



が慰められたことをエピソードを交えながら伝えました。藤井住職は、和解事業として 2017 年に遺族 143 名が参加して天津で行った追悼活動の様子を話されました。

昼食の後しばらく休憩し、午後は中国人被爆者について学習しました。

強制連行された中国人の中には 2 つの事件に巻き込まれて広島で被爆した人が 19 人います。地元放送局 RCC が制作し 1993 年 8 月 6 日に放送した「トンネルに風が吹いた日～強制連行・被爆した中国人を追って」のビデオを見て、2 つの事件の背景や被爆者の戦後の苦しみについて学びました。

善福寺での活動を終えて、再びバスで午後のフィールドワークに出発しました。津浪収容所跡を車窓から確認し、作業現場で掘り出し口である西谷の立坑を訪問。7.7km の導水トンネルは途中 9 か所の堀口があり、多くは横坑だが、ここは立坑であることを説明。

次いで大元神社に隣接した香草収容所跡とその工事現場跡地（掘り出し口）を訪ねました。香草収容所跡は戦後、杉が植林され、現在は杉林になっています。中国人は神社の鳥居をくぐり、国道に出て香草の工事現場に通っていました。工事現場跡地では、下り坂のカーブでトロッコのブレーキが効かずトロッコもろとも崖下に投げ出されて、目に砂が入り、治療を受けられないまま両目を失明した宋継堯さんのことも伝えました。

最後に、土居の収容所跡をバスの車窓から確認し、取水口を川の対岸から確認しました。ここは川底の

石を取り除き、堰堤を作り、導水トンネルへの取水口をつくったところで、63 人の中国人が従事させられました。

暑さ対策として今年初めて取水口まで歩いて行かず、車内で説明を済ませてコンビニの駐車場に停車したのですが、皆さんには車から降りて駐車場前の橋の上まで徒歩で移動していただき、遠目ながら全景を確認していただきました。ある参加者は「取水口を見てはじめて工事内容が理解できました。こ



んなに長い距離を掘っているんですね」と感想を述べられました。来年は従来通り取水口まで行ってフィールドワークを行った方がよいと感じました。

中国人の様子を直接見聞きした日本人は亡くなられたり、体調がすぐれなかったりで、フィールドワークで証言を聞くことはできなくなりました。バス移動中も含めて見た 3 本の DVD の中には、地元の住民の証言が収録されており、当時の様子を知る貴重な資料となっていることを実感しました。

今年は特に厳しい熱暑が予想されたので、善福寺での滞在時間を長くしたり、炎天下での説明をなるべく避けました。貯水槽に登るまでは日が陰っていましたが、その後は晴天となり心配したものの、参加者の協力とバスドライバーの巧みな運転と気遣いで、不調を訴える人もなく、無事に全行程を終えて定刻の 4 時半に資料館前に戻り、フィールドワークを終えました。